

岩礁に付いている貝類 能古島小磯付近

# 能古島周辺の貝るい達 (1) 泊 秀治

## 潮騒の遠鳴りを聞きつつ育つ

まず、ここで私事から書くのは誠に恐縮ではあるが……。

何の才能も特技もたない私は、糸島半島の西部加布里湾の奥底で干拓地として扱がる小作農家の長男として生れ育ったのである。農業の合間には干拓の潟、河口での漁業生産に従事していた。

### ◆海苔の養殖

私の両親の家は干拓地であり米麦はあまりとれないために副業として漁業権を手に入れていたらしい。

長野川と泉川の河口にあたり、湾奥での干潟に恵まれていた為、海苔の養殖を家族ぐるみでおこなっていた。

今でこそ海苔採りも機械化されているが昔はすべて手漉きでおこなわれていた。海苔の幼芽が定着する篠竹（「ひび」と呼ばれ海苔または牡蠣の胞子を付着成長せしめて採集する為、海中の干潟に立てる竹または粗朶）取り、ひび刺し、海苔採りなど

の仕事がある。海苔採りは二三人で川船に乗り込み、厳寒の頃、干潮に合わせて「ひび」についた海苔を摘むのである。専門的技術を要し、寒冷のため子供は手伝いできぬものであった。



海苔ひび風景 『有明海の漁』中尾勘悟著から掲載

さて十二月から、干潮に合わせ海へ出かけるため毎日の潮時が必要であるが田舎では俚言、諺として覚えられていたようだ。母の記憶をたどれば潮の干満は旧暦によるもので次の様である。

- ・日に一時間ずつ潮の干くとが遅うなる
- ・月天井に港潮なし（月が真上に昇ると港の汐は引いている）

能古博物館だより

・五日、二十日の朝残り【五日と二十日は朝も潮が引いている】

・九日、十日の明暮だ 又は九日十日の夜潟 朝潟【九日十日の朝、夕は潮（汐）が引いている】

・一日は来ても二日は来るな【干潟での干満の時間帯は今日と明日では違っている】

・二十日の月の出るまでは盗人の嫁も起きとらん。【二十日の夜は真暗で月が出るまで潟には行けない】

・蛤の口のあく日（解禁日の事）十月一日～三月三十一日迄）

◆貝類の養殖とカキボウとり

海苔の養殖は限定されていたので、それ以外の合間には貝を採っていた家は多かった。干潮時に潟にて蛤を採り、余ったものは生簀に放殖し、必要な時にりに行った。

また、堤防や橋桁についているカキボウ（牡蠣）をとってきでは、夜なべをして牡蠣の身を打ち出し、バケツに入れて翌朝町に売りに行っていた。

◆マシジミ貝採り ほうぜい拾



牡蠣打ち 『有明海の漁』中尾勲著から掲載

長野川の河口ではマシジミを採り、干潟にほうぜい（ウミニナ）を採り、共に子供の仕事で、売りに行っていた。潟や河口ではツガニ（藻屑ガニ）や鰻とりなどもしていた。

だが残念なことに、こうした副業も漁業が衰微してより漁業権を加布里に譲ったようだ。かくして私は幼い頃より潟や海に深くかわりを持ち続けながら今に至っている。ライフワークはやはり海にかこまれた能古島となった。

能古潮騒彷徨

博多湾内の緑の寶石とも呼ぶたい能古島は、海産貝類の宝庫である。能古島をとりまく海

流を逆のぼるとフィリピン沖の北赤道海流と南シナ海からの暖流が台湾東方で合流し、琉球列島を北上、九州南岸で日本海流（黒潮）と九州西岸を北上する対馬海流とに分かれる。

これからさらに対馬海峡の玄界灘を東へ流れて山陰、北陸へと流れるが、その暖流の一部が博多湾へと流入することは、すでに地元の方が熱帯性のアオイガイを収集



潮流の図

されていることでも実証されている。この暖流は暖海性の魚介類を運んでくる為、『海のベルト・コンベア』ともいわれている。湾奥の能古島にも、この暖流に乗って種々の生き物が漂着し、すでに昔から定着している貝類もいくつかみることが出来る。又、現在も

次々と漂着していることから、能古島は貝類の生棲に適しているといえよう。

これら運ばれてくる貝類は温熱系の種類が八〇%、寒流系の

ものが二〇%である。この温熱系の貝類の中に沖繩、台湾、太平洋、インド系が三七%を占めている。海が荒れる玄界灘に接する地方では、巻貝「二」に対して二枚貝「二」の割合であるが、博多湾内の能古島を中心に打ち上げられた貝と比較すると、巻貝「二」、二枚貝「八」の逆の現象がみられる。

近年、海洋汚染が進み、いくらか浄化されとはいえ、干拓、埋立ての影響をまぬがれる事はできない。本来の海の自然は今津湾を中心に、室見川↓能古↓志賀島の線より西部に限られて

いるようだ。博多湾内の漁港としては西戸崎、和臼、箱崎、伊崎浦、姪浜、今津、唐泊、能古、志賀等があげられるが、近代化の波にのまれ、護岸工事や港湾施設の建設等で、やはり自然の体系がこわ

されているように思う。この様ななかでも、比較的自

## 昭陽先生・古処先生に学んだ「村上佛山」について

村上 良春

先日私は、祖先「村上佛山」が若い時期に学んだ亀井昭陽先生・原古処先生の資料がたくさん保存・展示されている事で知られている能古博物館を訪ねました。そこで、南冥・昭陽・小栗各先生の真蹟に直接触れ、二〇〇年前の世に想いを馳せました。

村上佛山は私の四代前の祖先で、今私が住んでいる行橋市に、私塾「水哉園」を開いたのは、一八三五年（天保六）年でした。佛山は十五歳で秋月の原古処の塾に入門し、秋月在学中に一時、亀井塾で亀井昭陽に学んだ折、塾長をしていた広瀬旭荘とも知り合いました。古処が亡くなった後は、たまたま佛山宅の近くで病氣療養をしていた原白圭・原采嶺を、当時佛山の隣村で家塾を開いていた藤本平山（二八一七年頃に亀井塾で塾長をした人物）の家に招き、そこで佛山も親しく教えを受けました。

(3) 第46号  
しかし、その白圭も一年後には急死してしまつたので、佛山はその後、定師を求めず長い遊学時代を過ごし、京都の貫名海屋をはじめ、草場佩川・頼杏平・坂井虎山・吉田平陽

等に教えを受け、二十六歳で故郷に私塾を開いたのでした。以後一八七九（七十歳）年で生涯を閉じるまでに四十五年間、その後二代めに五年間引き継がれ、「水哉園」は五〇年間続きました。「入門帖」では約一三〇〇名が確認できますが、正式に入門せず近くから通つた者を合わせると約三〇〇〇名が学んだと言われています。

たまたま、地元の小・中学校の校歌に歌われているような漢詩人の家に生まれ、なんとなく面映ゆいような、どこことなくプレッシャーを感じながらの子供時代だったと思います。

幕末、明治初期にかけて県内だけでなく、大小合わせると一五〇以上の私塾が存在したと言われていますが、その塾跡が資料と共に保存され、しかもその場に子孫が残つて生活しているケースは非常に稀となり、福岡県の文化財として指定されている私塾跡としては、今では「水哉園」と「蔵春園」の二箇所だけになっています。

二〇〇年近く歳月が経つた今、当時の庭園や資料を維持・保存す

ることの難しさをつくづく感じている今日この頃です。

以下は、先日地元の「歴史講座」で、「祖先、村上佛山について」というテーマで話をした時に使用した資料「郷土に生きた偉人「村上佛山展」図録」（行橋市教育委員会）から抜粋しました。

### 少年時代

村上佛山は、文化七（一八一〇）年十月二五日に豊前国京都郡久保手永上稗田村（今の行橋市上稗田）に生まれた。字は大有、幼名は健平、通称彦左衛門、潜茂。号は佛山、至拙老人。

父は盛之、母は田川郡高野村平



村上佛山生家 行橋市教育委員会所蔵（写真）

石家のお民。佛山は三男で、兄の義暁（通称彦九郎、号長峽）は新津手永大庄屋をつとめ、もう一人の兄は早世。弟貴之（通称半六）は久保手永子供役、稗田村庄屋をつとめた。

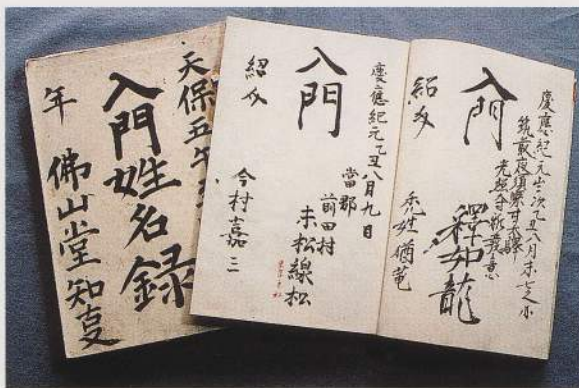
佛山が初めて就学したのは文政元（一八一八）年九歳の時で、近くの津積村大島八幡宮宮司定村直榮に読み書きなどを教わつたと思われる。郷里を離れて筑前秋月の原古処の私塾「古処山堂」に入塾したのは、文政七（一八二四）年十五歳のときであつた。しかし、わずか二年で古処が病死したため帰郷した。その間に文政八（一八二五）年には、亀井塾に遊学、亀井昭陽に謁し当時の塾長、広瀬吉甫（旭荘）と出会いその後長い親交が続く。

文政十（一八二七）年、十八歳の時、京都郡岩熊村「巖邑堂」に原古処の長子白圭と娘采嶺を迎え文学グループを結成し「小倉山房吟社」と称した。佛山は白圭から理屈よりも実践を尊ぶこと、「行い」「行為」の大切さを学び、それは佛山の人生全般に大きな影響を与えた。しかしわずか一年後の文政十一（一八二八）年、惜しくも白圭は早世。その後の佛山は特定の師を持たず、博多の亀井昭陽、京都の貫名海屋、多久の草場佩川らのもとを遍歴し、それは約六年間に及んだ。

## 水哉園の創設

佛山が郷里の上稗田に私塾「水哉園」を開いたのは、天保六（一八三五）年二六歳の春。同じ年、仏山は近村大野井村の安広久と結婚し、生家に近い長峡川のほとりに分家して居を構えたのである。

この頃、都市のみならず農村地でも学問への欲求が高まり、日本各地で私塾が開設されていた。近隣でもすでに日田の咸宜園、豊前の蔵春園などの名が知られていた。「水哉園」の名は「孟子」（離婁章句下篇）の中の一節「徐子曰、仲尼亟称於水、曰水哉水哉……」（徐子



水哉園入門帖 行橋市教育委員会蔵(写真)

いわく「仲尼は亟ばしば水を称して『水なるかな 水なるかな』と日ひたまえり」から取られたものである。水の流れに源があるように、学問にも根本が大切であると説いている。それは、長峡川のほとりに建つこの私塾にはふさわしい名であつたらう。

「水哉園」では四書五経を中心に詩集、文集が教科書として使われ、試験による進級制度がとられていた。佛山の教えは、知識よりも道義、理屈よりも実践を尊重し、詩作を通じた情操教育を行っていた。さらに、年間行事に組み込まれた神事、祭事、村の行事への参加、日頃の行いすべてが門人としての教育であつた。

当初わずか二名で始まった「水哉園」であるが、佛山の詩人としての名声も上がり、入門者は年々増加していった。

## 詩集の出版

佛山が詩集発行を思い立ったのは弘化三（一八四六）年、母お民の古稀の祝いの席、佛山三十七歳のときであつた。門人にそれまで書き溜めてあつた詩を整理させ、四年後の嘉永三（一八五〇）年によくやく原稿がまとまり刊行へ向けて動き出した。門人の友石晴之助、守田房貴、



佛山堂詩鈔第一篇 行橋市教育委員会蔵(写真)

義弟の安広仙杖、旧友池内陶所らの協力を得て嘉永五（一八五二）年十月に『佛山堂詩鈔第一篇』は摺りあがつた。この詩集の完成を待って母お民は永眠。佛山が母のためにまとめた詩集は、佛山の名を全国に広め、詩人としての地位、評価を高めたのである。

その後、佛山の詩集は咸宜園を始め各地の私塾の教科書としても採用され、詩は「安政三十二家絶句」や「近世名家詩鈔」などにも選出された。佛山の詩は宋の蘇東坡や晋の陶淵明を模範としたと言

われ、平易、素朴で儒農の呼び名もあるほど農村の風景に溶け込んだものであつた。

詩集の好評により、水哉園入門者は増加した。また各地の知識人との交流を得て、村上佛山の世界は一気に広がつたのである。また明治元（一八六八）年、藩主小笠原氏より士籍に取り立てられた。

次いで、明治三年に第二篇、明治八年に第三篇が刊行され、寡作であつた佛山の代表作となつている。

## 門人達の活躍

佛山の晩年は家庭の不幸が続き、佛山自身も中風に悩まされていた。また、幕末の動乱により、水哉園も一時閉鎖を命じられる。この時、残つた数人の塾生の中には後に大臣を歴任し、子爵・文学博士・法学博士などの称号を得た末松謙澄（線松）がいた。一年の後、閉鎖はとかれ諸国の入門者が激増した。

老いて体も不自由であつたが、佛山の精神はすでに仙境にあつた。明治九（一八七六）年、御所ヶ谷の佛山ゆかりのホトギ山（佛山）中腹にある巨岩（高2.5m 幅3.5m 厚2.0m）に「藏詩巖」と彫り、その下に佛山の全作品（詩集・文章）や刀剣などを門人が漆塗りの箱に入れ蠟で密封し納めた。藏詩巖の



藏詩巖 行橋市教育委員会所蔵(写真)

題字は旧門人で佛山の良き相談相手となった守田房貫(冀洲)であった。明治十二(一八七九)年正月には旧門人達が集まり水哉園敷地内に佛山の徳を称える生墓が建てられた。(題額は伊藤博文・撰文は草場船山)五月には門人、知人、地元の人々の手で古稀の祝いが盛大に催された。佛山はこの年の九月、脳溢血で没した。最後まで門人たちに囲まれ、詩作に励んだ一生であった。

### 佛山をしる

と、水哉園で学んだ者はおよそ三〇〇〇名。その中からは、末松謙澄をはじめ満鉄総裁、安広伴一郎や宮内省学問御用掛、吉田学軒(「昭和」の元号考案者)など政治家、学者、医者、教育者など優秀な人物が数多く巣立っていった。

大正五(一九一六)年、佛山は宮内省より正五位を追贈された。

昭和十一(一九三六)年には佛山の子孫により水哉園跡敷地内に「佛山堂文庫」が建設された。この中には水哉園関係資料や佛山の遺品などが納められている。また、昭和三十二(一九五七)年に水哉園跡が県指定史跡に、昭和五十五(一九八〇)年に塾関係の資料が県指定有形文化財(歴史資料)となり、保存がはかられている。

※郷土に生きた偉人「村上仏山展」  
図録 行橋市教育委員会より抜粋

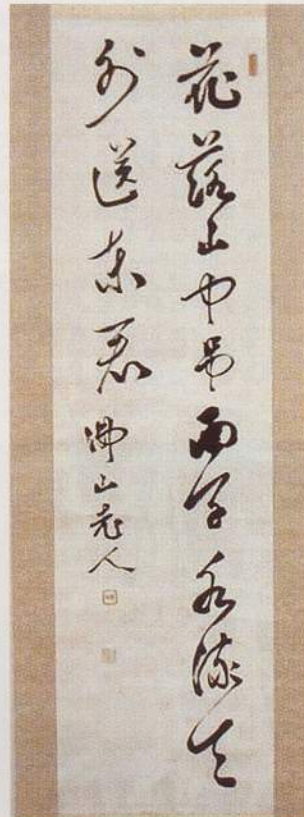
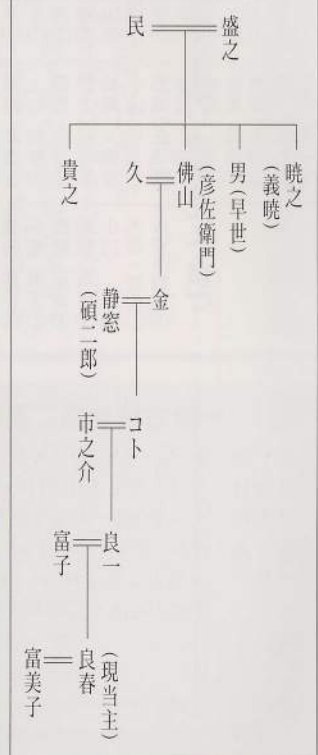
※村上佛山 — ある偉人の生涯—  
友右孝之著 参照

※郷土に生きた偉人「村上仏山展」  
図録 行橋市教育委員会 参照

※水哉園パンフレット  
行橋市観光協会 参照

行橋市文化協会 参照

### 村上家略系図



花落山中巾西子  
水流天水送東君  
花は山中に落ちて西子を巾ひ  
水は天外に流れて東君を送る

佛山老人

「西子」は春秋時代・越の美女「西施」、  
「東君」は太陽の意か、「花」を桜と仮定  
すれば、すきゆく春の情景を詠んだ詩か。

▼右に紹介しております村上佛山の掛軸は当館収蔵品の一部です。

### 事務局から

▼水哉園跡には現在も子孫である村上良春氏が住んでおられます。その敷地内には佛山堂文庫が建てられ村上佛山にかかわる数多くの資料が大切に保存されています。当博物館だよりの発行に際し村上良春氏をはじめ「郷土に生きた偉人「村上仏山展」」図録からの抜粋、写真の提供など行橋市教育委員会から特別な御配慮、御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

能古博物館だより

能古博物館協賛会・友の会

〔法人協賛会員〕

敬務略・順不同

浄土真宗本願寺派 浄満寺

(医原土井病院)

ワタキューセイエイモア(株)

(株)福岡メテイルカリース

(株)フリーワルデーターサビス

福岡板坂郵便局 鬼谷信孝

福岡赤坂郵便局 戸田正義

日清医療食品(株)福岡支店

(株)福岡経営管理センター

(株)サンコー

(医恵光会原病院)

(株)西日本銀行 和白支店

(株)西日本銀行 千代町支店

(株)西日本銀行 香椎支店

(株)西日本銀行 土井支店

(株)西日本銀行 新宮支店

(株)西日本銀行 箱崎支店

(株)西日本銀行 久山支店

(株)サンネット

(株)福砂屋

(医笠松会有吉病院)

街ウエダ建築社

御寄付者芳名

巽 雄一様 「ありがとうございます」

花木をたくさんいただきました。

関 敏巳様 明石 照男様

ありがとうございます。

書籍をいただきました。ありがとうございました。

山口加寿晶様 ありがとうございます。

〔協賛会会員〕

- 松本盛二③ 南誠次郎⑭ 中山重夫⑨ 早船直登⑧ 菅正夫⑬ 笠井徳三⑦ 安路光正⑮ 亀井准輔⑬ 熊谷雅子⑥ 石橋観一⑫ 木原敬吉⑧ 庄野貞治④ 原田國雄⑦ 森光英子⑧ 永井功⑦ 緒方益男⑦ 浦上健⑩ 山本稔⑩ 田中貞輝② 武内隆恭② 白水義晴⑧ 石野智恵子⑬ 翠川文子⑨ 多々羅節子⑨ 熊谷豪三④ 有江勉① 山崎拓① 西熊太⑦ 七熊代松⑦ 西宮代太郎⑦ 片桐寛子⑦ 西村俊隆⑥ 明石敬人④ 矢部俊幸③ 上原孝正③ 早船真一① 西方俊司⑤ 土生千秋② 亀井千代② 土生信子①

〔友の会会員〕

- 立石武泰⑪ 伊藤茂⑪ 玉置文枝⑬ 水田和夫⑥ 木戸龍一⑩ 岡部六弥太⑩ 星野万里子⑧ 吉村雪江⑧ 安松勇一⑦ 上田良① 高田浩二⑨ 桑野次男⑫ 藤木充子⑫ 和田宏子⑫ 行成静子⑫ 片岡洋一⑬ 石川文之⑧ 都筑久馬⑦ 横山智一⑧ 古賀清子⑩ 西崎集⑦ 岡本金蔵⑦ 三宅碧子⑬ 林野金子⑨ 宮十九楼⑪ 安永友儀⑨ 織田喜代治⑥ 上田博② 鶴田スミ子⑦ 塚本美和子⑦ 伊藤康彦⑤ 寺岡秀實⑤ 奥田種美⑤ 井上敬枝⑤ 石橋清助① 吉原清水⑪ 隈原清次⑪ 吉富とき代⑤ 大山宇一⑥ 葉山政志⑧ 川島貞雄⑩

- 岸 洋子⑪ 久芳正隆⑨ 半田耕典⑥ 武藤瑞こ④ 莊山雅敏⑥ 吉田洋一⑤ 永岡喜代太⑤ 神戸純子④ 渡辺美津子⑤ 山田博子⑤ 佐藤泰弘⑥ 前田静子④ 飯田晃⑤ 神戸朝男⑥ 池田修三⑧ 吉田一郎① 岩谷正子③ 小川幸三② 榎田菊朗② 増田義哉④ 宮嶋熊太郎⑧ 宮嶋千草④ 松坂洋昌④ 福永実① 古川映子⑥ 古川俊規⑥ 衛藤博史⑥ 伊藤泰輔⑧ 西村達頭⑧ 執行敏彦④ 渡辺千代子② 後藤和子⑦ 脇山浦一郎⑪ 川浪由紀子⑪ 川田啓治③ 足達輔治⑤ 中村ひろえ⑨ 古賀謙二⑦ 野尻敬子③ 大野幸治⑦ 榎田正己⑨ 青木良之助⑨ 神崎恵五郎⑦

- 金子 柳水⑦ 佐野至⑧ 井手親栄⑩ 宮崎春夫⑩ 鬼丸碧山⑦ 小山元治④ 山崎三治④ 吉瀬宗洋⑬ 西賀義明⑬ 市丸喜一⑨ 豊島嘉穂② 守瀬孝二① 田上紀子⑧ 中畑孝信⑧ 西嶋洋子⑧ 村上靖朝⑧ 村上靖朝⑧ 木原光男⑥ 野野健次⑦ 鈴木忠洋子① 吉村陽子⑦ 吉村陽一郎⑦ 石橋善弘⑦ 徳重謙治③ 岩淵謙治③ 武田正勝② 武田初代子② 近藤克文⑤ 西藤雄司⑤ 榊島政信③ 上杉和稔① 野上哲吾⑥ 富田哲子⑥ 益尾天獄⑥ 小山正文① 石橋正治① 龜石正之① 藤田一枝④ 松尾清美③ 蓮尾正博③ 森祐行④ 吉安蓉子③

- 山下清久② 杉原正毅② 大久保昇② 党隆雄⑥ 福澤昌弘② 小嶋幸雄⑤ 樋口陽一② 木下勤⑦ 酒井カツ⑧ 島義博⑤ 田上紀子⑧ 中畑孝信⑧ 西嶋洋子⑧ 村上靖朝⑧ 村上靖朝⑧ 木原光男⑥ 野野健次⑦ 鈴木忠洋子① 吉村陽子⑦ 吉村陽一郎⑦ 石橋善弘⑦ 徳重謙治③ 岩淵謙治③ 武田正勝② 武田初代子② 近藤克文⑤ 西藤雄司⑤ 榊島政信③ 上杉和稔① 野上哲吾⑥ 富田哲子⑥ 益尾天獄⑥ 小山正文① 石橋正治① 龜石正之① 藤田一枝④ 松尾清美③ 蓮尾正博③ 森祐行④ 吉安蓉子③

- 村上修一④ 小谷昌弘④ 阿部昌弘④ 結城進② 永石順洋⑥ 重松アツ子④ 藤吉マツ子④ 亀井勝夫② 岸川龍① 山本光玄④ 吉開史朗④ 田中靖高① 香立スミエ① 藤瀬三枝子④ 野見山実③ 頃末隆英② 友原静生② 森口智子④ 山本信行① 尾澤健③ 井上陽一③ 寿美電気③ 矢野鈴子③ 藤崎和子③ 宮崎直直④ 原田雄平② 山本勲② 高根襄② 高根幸子② 柴田優美② 谷口澄江② 横田武子① 石橋順子② 西原友彦① 松熊友彦① 小川誠③ 木皿敦① 矢野義憲①

●能古博物館ご案内●

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)

休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館

入館料 大人400円・中高生無料

交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩10分)→博物館

〒819-0012 福岡市西区能古522-2

☎(092) 883-2887

FAX(092) 883-2881

ホームページ <http://www.nokonet.com/museum>

メールアドレス [museum@nokonet.com](mailto:museum@nokonet.com)

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

財団法人 能古博物館

納入方法Ⅱ郵便振替〇173〇96097〇

〔資金援助を受ける〕

〔館維持、資料収集、施設整備等の〕

〔館の活動、館誌購読と催事企画に参加〕

〔個人年間3万円(何口でも可)〕

〔法人年間3万円(何口でも可)〕

〔個人年間1万円(何口でも可)〕

〔法人年間3万円(何口でも可)〕



※新規の御加入(先号以後、平成十六年六月三十日現在)を、記載いたしておりますので、何卒ご芳名をご確認ください。ありがとうございます。

自然と文化の小天地創造